

## 瓶子窯跡出土の文字陶片

● 武部真木

瀬戸市嵐山町に所在する瓶子窯跡は、近世の茶入を多く焼成した窯跡として古くから存在が知られている。この窯跡の物原部分について発掘調査を行ったところ、文字を有する小陶片が多数出土した。近世の窯業遺跡に限らずほとんど類例のない出土遺物であり、しかも文字の多くが「人名」と判断できるなど極めて特殊な資料であることがわかった。生産工程上での陶片の役割をはじめ、瓶子窯跡の操業時に結び付く人物の特定など調査はまだ端緒についたばかりではあるが、瓶子窯跡の解明のみならず茶陶生産に関わる重要な史料の発見と考え、報告書刊行に先立ち概要を紹介しておく。

### 1 遺跡の概要

遺跡は愛知県瀬戸市の東部、矢田川の支流である赤津川沿いの丘陵部に位置している。右岸の丘陵部に現在の集落が広がり、近世の窯跡の多くは主にこちら側に集中するが、瓶子窯跡は集落から離れた赤津川対岸の丘陵部に立地している。大量の茶入を焼成した窯として早くから存在が知られており、また寛文12(1672)年に編纂された『茶器弁玉集』に藤四郎が茶入を焼成したという伝説の窯の名称として「瓶子窯」が記された(註1)こともあり、文献との関連からも注目されていた遺跡である。

道路建設に先立ち遺跡の保護を目的とした範囲確認調査が平成10,11年度(財)瀬戸市埋蔵文化財センターによって行われ、東西方向の谷筋の南向き斜面で2基の窯体および作業場等が確認された。連房式登窯1基ともう1基は「大窯・連房連結窯」(仮称)という特殊な構造をもつ窯体であった。出土した遺物の年代観により、17世紀第2四半期～後半にかけて操業し、2基はほぼ同時期に操業を停止したものと考えられている(青木2000)。

今回の県埋文センターの調査範囲は、窯体のある丘陵の下方、物原の末端および谷底の自然流路に相当する。遺構はほとんど確認できなかったが、採集した文字陶片を含む製品、窯道具類は試掘調査分も含めてコンテナ約800箱の

分量となった。

### 2 文字陶片の出土状況

文字陶片は主に物原の堆積層より、その他の廃棄された遺物と一緒に出土した。平面分布では2基の窯体の焚口の正面方向、そのほぼ中間の丘陵下方で西側(下流)に向かって少し広がる。およそ5mグリッド3つ分の範囲に全体の約7割と密度の高い分布が認められる。直線距離では第2号窯(連房)に近接するものの、2基の窯の物原が重複する可能性もあり、どちらの窯に伴うものかは特定できない。そのほか谷底の自然流路堆積層でも数点を確認しているが、製品等も含めかなりの量が流出したものと予想される。なお、製品や窯道具等に付着して出土した例は確認されていない。

### 3 文字陶片の形状

文字(記号を含む)は筆書きあるいは鋭利な道具で刻書されており、総数で355点を数える。形態では、まず破碎した小陶片(I類)、粘土板(II類)、その他(III類)に分類でき、I類が277点、II類が23点ありこれらが全体の85%を占める。(III類はさらに分類が可能であり、明確な文字が認められるものはごく僅かであった。主に窯印のような記号が刻まれている。大半が「色見」として理解できるためひとまず本稿ではこれを

(註1) 寛文12年(1672)小堀遠州門下の茶人またはその関係者の編纂による記録。「瀬戸窯所之次第」「一 瓶子窯 藤四郎此窯ニテ唐物ヲ焼ト云説アリ」

除く。)

**I類** (no. 1～40) 整形・乾燥後の未施釉の製品を大雑把に割りその破片をそのまま利用するものが多く、稀に周囲をこまかく打ち欠く、あるいは周囲を研磨して調整するものがみられる。長さ5cm以下、幅3.5cm前後の大きさの長方形に近い破片を用いる。茶入や天目茶碗、端反碗、播鉢、徳利など瓶子窯跡で大量に作られる器種が利用されており、なかでも碗類が最も多い。未施釉の陶片に鉄釉で文字や記号を筆書き(手法a)したのち、窯で焼成されたようである。焼成時の降灰などにより文字が不鮮明となることを想定してか、約半数の資料では両面に同じ文字が記入されている。

**II類** (no.41～48) 5×4cm未満、厚さ0.6～1cm前後の粘土板を手捏ね成形するもので、表面に手の平や指の圧痕が明瞭に残る。形状は楕円形、円形、長方形などがある。粘土板の胎土には匣鉢ほどではないものの、製品より砂を多く含む粗い土が用いられている。片面に粘土板成形時に文字や記号を鋭利な工具で刻むもの(手法b)が15点(65%)を占め、I類と同様に焼成前に両面に鉄釉で筆書き(手法a)するものが7点(30%)、刻書と筆書きの両方を有するもの1点がある。

## 4 文字(記号)の内容

図示した主な資料の解説案を表1に示す。まずI類には1～12,16など字数の多い資料が含まれ、名字を読み取ることができる。13～27のような2～3文字の資料も人名と思われる字句が多い。したがって1文字の資料や仮名も多くが人名の省略形であると予想される。表裏両面に同じ文字を記すことが多く、また5,6,7や9,10など同じ字句が複数点で確認できる。40の例や単に「○」と描く記号も存在する。II類は基本的に文字数が少なく41,42

のような例は稀であり、1文字や記号、仮名文字であることが多い。

人名で最も注目すべきものが(1)「柳生兵助」である。(2)「□柳生」、(3)「兵助」やこれ関連して(4)「柳」や図示以外の資料「兵」なども含めると15点を数える。次いで名字を伴う人名では9,10など「荒川□四郎」が5点あり、5～8など「奥田太郎左」が5点、関連して「奥太」2点などがある。その他にも(11)「半岩弥カ五兵」、(12)「石川八郎兵衛」、(16)「黒柳吉□/久之丞」があり、ほか数人の名字が存在する。文字数の少ないものでは(25)「七助」が2点、46,47の「あさ」は他に「安左」と「安」などをも含めると9点がある。「次郎兵衛」「弥助」「新左衛門」や図示した以外にも「平左衛門」「太郎兵衛」「市右衛門」「伊左衛門」「清右衛門」「弥九郎」「孫兵衛」「藤兵衛」「勘兵衛」「吉兵衛」「弥之助」「月仙」「庄太」「松助」などがある。また1文字では「や」が19点と最も多く、「小」5点、「大」「八」「十」「百」「伊」なども2点以上が確認できる。

## 5 「柳生兵助」について

「兵助」は柳生家の幼名に多く、窯の時期に対応すると思われる主な人物には、尾張柳生の創始、柳生兵庫助利厳(如雲齋、天正7～慶安3,1579～1650)とその庶子である柳生兵庫厳包(蓮也、寛永2～元禄7,1625～1694)が挙げられる。尾張徳川家初代藩主義直と二代光友の代に藩の剣術指南役を勤めた尾張藩士である。意外にも、後者の蓮也について茶陶との関わりを示す記述が存在した。

『名古屋市史 人物編』(註2)によると、浦蓮也、本氏柳生、名は厳包。初め七郎兵衛、兵助と称しのち兵庫と改める、とあり、寛文8年(1668)には光友に上書して職禄を辞している。寛文年間に隠居して小林(名古屋市中区小林町)

(註2)『士林派回』『昔咄』『諸士傳略稿』『尾張名家誌二編』をひく

(註3)『昔咄』第三卷(『名古屋叢書20』随筆編3)／『をはりの花』風の巻「寛文年間に茶入一百ばかり作り瀬戸窯にて焼かせたる事あり」とあり、併せて蓮也の銘が採録されている。『をはりの花』は瀬戸焼に関する書で、幕末の尾張藩士で陶芸家、刑部陶痴の稿本『瀬戸の花』を土台として加藤弓枝・坂野陶林がこれに新資料を加え、柴山準行の校閲を経て1902年(明治35)に脱稿し『瀬戸物』と題した。1902年(大正9)一部を改訂し『をはりの花』と改め瀬戸陶磁工商同業組合から発行。1932年(昭和7)陶器全集刊行会が複製刊行。

(註4)『愛知県の地名』平凡社、小林に隠居した時期は寛文10年から9年間とする。清浄寺の位置は尾張名所図会にある牧と三左衛門長清の居城であった小林城の辺りか。

(註5)『昔咄』記述は徳川光友の「大殿時代」(元禄6～13年)のこと、とある。

に邸を下賜されて住むようになり、ここでは広大な庭園を修築し、「又、牡丹をすき、茶入をすきて、瀬戸にて大分やかせぬ。」(註3)という暮らしであったという。その他に刀の鍔の製作も手掛けており、後に「蓮也しこみ」「小林つば」などと呼称され珍重されたという。元禄7年に七十歳で没し、菩提所は白林寺に設けられ、邸あとはのちに寺となった(註4)という。

ところで蓮也と親密な関係にあった二代藩主徳川光友は、寛文4年に着工された横須賀御殿(愛知県東海市・烏帽子遺跡)の敷地内に御庭窯を築造し、唐物肩衝の写しを制作したという人物であり、さらにその代には瀬戸の陶工に金子二百両を与え茶陶優品の製作を指示するなど(註5)尾張藩が瀬戸の茶陶生産に積極的に関わったという記述も残されている。また延宝6(1679)年には赤津の陶工彦九郎が茶入生産のため連房式登窯ではなく「大釜焼」を行っていたとあり(註6)、実際瓶子窯跡とは数kmの距離にある小長曾陶器窯は、茶陶制作を目的に15世紀代の窖窯であったものを17世紀末に改造し再利用していた。

以上のように17世紀後半にかけて、高級茶陶をめぐる尾張藩の関わり方や茶陶生産の特殊性を示す史料が散見される。浦蓮也が茶入の製作を行ったのもほぼこの時期に重なる寛文年間以降と読み取ることができ興味深い。

蓮也の事績を伝える年代は、瓶子窯跡出土資料の年代観、操業期間にほぼ収まる。陶片「柳生兵助」がこの蓮也を示している蓋然性は極めて高いと考えられる。

## 6 文字陶片をめぐる

瓶子窯跡の陶片資料のうちI類とII類は、いわゆる「名札」である。おそらく特定の製品の

傍らで製品と同時に焼成され、窯出・検品の際に不要となり廃棄された窯道具の一種であろう。瓶子窯の焼成器種において、名札に想定される製作者あるいは注文主などの情報は茶陶以外には必要なく、なかでも茶の湯独特の価値観や美意識から生じる、極めて繊細な完成度が求められる器種、「茶入」に限定されるものであろう。

ただし、廃棄品の量が裏付けているように茶入は極端に歩留りの悪い器種である。なぜ焼成前に名札を付ける必要があったのか、そこには実に多くの疑問が残されている。未だ推測の域をでないものの、茶入を所望する人物は単なる注文主ではなく、制作により近く、深く携わるところに重要な目的があったように思われる。瓶子窯跡は所謂「御庭窯」や「御用窯」に類するもの、広義の「藩窯」に含まれる生産形態のひとつとして捉えられるべきであろう。

「瀬戸山離散」とも表現された瀬戸地域の窯業生産空白期の後、17世紀初頭以降に再び始動する瀬戸の茶陶生産は、尾張藩の強力な介入抜きには成立し得ず、また桃山期の茶陶ではなく室町期の唐物を指向した茶入の生産がその復興の足がかりになったとの見方がある(井上1996)。陶片の人名の中に尾張藩士や尾張藩に關係する茶人等、あるいは陶工の名前が比定されるとすれば、操業の実年代や生産形態を検証する重要な根拠となり、かねてより特別な窯と認識されていた瓶子窯跡の特殊性が具体的に実証されることであろう。

謝辞 以下の方々には陶片の文字の訳読ほか多くの御教示をいただきました。

福岡猛志・曲田浩和・高部淑子・瀬戸口龍一  
(日本福祉大学)  
井上喜久男(愛知県陶磁資料館)

(註6)『森田久右衛門江戸日記』延宝6(1678)年、瀬戸の「彦九郎」が藤四郎の窯の写しとされる「大釜」で茶入生産を行っていること、兄弟3人が尾張藩の焼物御用であったことなどが書かれている。また『張州雜志 第十二卷』では元禄12(1699)年に「彦九郎」が命を受け小長曾・平窯で陶器生産を行ったとある。

### 参考文献

- 井上喜久男 1996「考古学からみた瀬戸茶入」『遠州の観た茶入—中興名物茶入を中心として—』五島美術館  
井上喜久男 1998「瓶子窯跡にみる瀬戸茶入」榑崎彰一先生古希記念論文集 真陽社  
丸山和雄訳読 1978「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 第5号』東洋陶磁学会  
青木 修 2000『瓶子窯跡』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 22  
河合君近 2002『国指定史跡 小長曾陶器窯跡』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告 27  
1986『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 63  
『名古屋市史』人物編第二、『瀬戸市史 陶磁史編』四、六

表1 文字の内容

番号	外面	内面	形態	手法	器種	備考	長mm	幅mm	厚mm
1	なし	柳生兵助	I	a	碗	破面やや摩滅	55	27	
2	柳生□	柳生□	I	a	碗か容器	破面やや摩滅	40	27	
3	兵助	兵助	I	a	茶入		-	20	
4	なし	柳	I	a	茶入か	破面に鉄釉付着	34	25	
5	なし	奥田太郎左	I	a	端反碗	破面丸く削る	34	31	
6	や	奥田太郎左	I	a	碗		28	28	
7	□□や	奥田太郎左	I	a	天目茶碗	周囲打ち欠き	35	36	
8	なし	奥田源左衛門	I	a	碗か		37	27	
9	なし	荒川緒カ四郎☆	I	a	碗		39	27	
10	なし	荒川□四郎☆	I	a	碗		41	30	
11	なし	半岩弥カ五兵	I	a	碗	破面やや摩滅	33	31	
12	なし	石川八郎兵衛	I	a	碗		31	29	
13	なし	次郎兵	I	a	丸碗		48	26	
14	勘右	勘右	I	a	茶入	破面に鉄釉付着	46	19	
15	新左	新左	I	a	茶壺か	破面に鉄釉付着	36	24	
16	久之丞	黒柳 吉□	I	a	茶壺か	周囲打ち欠き	60	29	
17	弥九	弥九	I	a	搦鉢か容器		40	29	
18	庄太	庄太	I	a	碗		56	34	
19	平	平左	I	a	茶壺か	破面に自然釉付着	41	27	
20	山本	山本	I	a	碗		42	27	
21	三丸	三丸	I	a	茶入		35	33	
22	なし	立田三	I	a	碗	破面やや摩滅	40	25	
23	三平次	三平次	I	a	搦鉢か	周囲打ち欠き	43	28	
24	弥助	弥助	I	a	搦鉢		52	37	
25	七助	七助	I	a	茶入		28	21	
26	なし	□主	I	a	端反碗		31	28	
27	新左衛門	新左	I	a	碗		36	26	
28	仙	山	I	a	容器か	周囲打ち欠き	45	34	
29	山	仙	I	a	端反碗	破面に鉄釉付着、やや摩滅	48	42	
30	万	なし	I	a	搦鉢か容器		35	28	
31	尊	尊	I	a	搦鉢か容器		37	29	
32	遠	不明	I	a	小型の碗		36	22	
33	川	平	I	a	容器か		32	26	
34	伴右	伴右	I	a	搦鉢か容器		37	27	
35	太	太	I	a	不明		41	34	
36	権	権	I	a	茶入		34	33	
37	とく	とく	I	a	端反碗	破面に自然釉付着	38	24	
38	くに	くに	I	a	茶入		30	25	
39	たひ	たひ	I	a	碗	破面に自然釉付着	37	21	
40	なし	○に×印(記号)	I	a	端反碗	周囲打ち欠きか	39	34	
41	書 之カ	刻 石勘右□	II	ab	楕円形粘土板		42	28	8
42	なし	半十	II	b	楕円形粘土板		45	16	7
43	成	なし	II	b	楕円形粘土板		33	23	7
44	なし	山	II	b	楕円形粘土板		32	27	7
45	なし	や	II	b	三角形粘土板		34	22	7
46	なし	あさ	II	b	楕円形粘土板		33	28	7
47	なし	あさ	II	b	長方形粘土板		36	22	6
48	なし	の	II	b	円形粘土板		38	35	16



図1 文字陶片実測図 (1) S= 1/2

